中村俊定文庫
文庫 18
292
2

宮城県図書館

序

沖世月末日おほ田毛むさ一四の今村氏端く宇居
の里老竜寺氏やとりとすあ一雙ゑちりなるの
久しく風雅好き申山寺友に伊山あそ虎岡素
さ〻く蕉門と和歌いまりくほれに倫明く
沖世の風ほとうあれと今はまあ集にこ一き
一くも陽ハりて氏ちくやと久くを人彩う屋に
為此今青ハ伊山のりあ一ち申伊勢の附き

市村俊定文庫

凉袋稿

ばかりはむとて　一雙ある向妻妻乃杯にて七名八杯
乃酒あるいや平岩ノ世一又向義の杯にあるや
平日ごは人多為ごとに家隨身一〇義の
酒もちて立帝乃奴多明るもりるの
此乃風流ばたち人ごもは敷乃ゑ設をさもあれ
つく議論乃牧谷酒も是ごとにもたれを特
緑乃ごとごの門原乃病にはれい妻化い中ゝ
隨宜ノ世ごとに足ばう茶ゑ多ノ

附に味あるごと為乃模如ば足先をごは難がち
一国も及ばずされいばうごの為ハ辞ゝ今を茶
妻乃宴ノ人ばあを為の神術に向ごは一ゝ情中の
れけるばさ多上ゑ持のあるいあるばつゝ風呂
乃ごとの補茶ばあるふ妻世おの汁ゑ志ゝ
あゝ点付ごうノ心ばゑすてごはうの為乃ば
ゆくんごとしく是も茶妻あ家ゝ為げゑ酒うるふ
切ばゆんゝ是おし妻毋乃杯へち家　——と

小板小掛り人八ありし板平を防ぐ為板路に
同為あり れむ平は あ年一の路は尺余り記論も
ようは一々乃仏ぶ考えようして言の百乃味と云の
なる わ ぶ 旨と 行 ゆ 林 彼 に 一 任 す る 平 蓼 五 乃
ぶ 平 き い ふ 平 て は
伊 山 向 く り く 尺 彩 の 為 ぶ 叶 む 平 日 為 は 接 に
恐 ひ 平 く れ い 案 ま と 平 ぶ ま く は 為 々 い 行 な
は ま く と ひ い 笠 に 是 い 姨 り 足 い 坂 を 行 ふ 乃

坂 に 及 ひ 為 乃 ま り ぶ 百 ま よ ま く た ま く は
為 信 坂 の 平 時 余 第 に け く る 域 ぶ 山 ま は 生 今
志 ち 東 ま て 二 百 板 時 人 く 板 を 立 れ こ れ い 尺 為
ひ ま り ま く 平 陸 ま の あ ち へ い 通 ま ま 医 為
餘 海 ま れ く の ま く 同 世 ま に 渉 ぶ 生 い ま る 為
ま は 生 人 平 乃 為 言 ま 坂 ゆ ぶ ま 医 ま れ い
平 の 迹 立 に 為 ま く 挽 平 陸 ぶ ま は 草 ぶ 掛
平 路 御 ま て ま は 乃 仏 ま く 酒 大 も 強 弱

もしくはちんぴらこまあるいさいれのあるじは好きに
及ばずとも付くまるまるはまるはたたこは抜きまるも
時々は出ずにちょっと出ずハ出てに言外のあるまえ
遠山ばかりつくくふるあるる
かくのごとくつくるはあのとばあるこちらくらり
宮ばめるまかばの自分とあと今抜よ入入り知ふ
ものくは是ば周こるる樹中まる鬼窟杜の流汁
る笑ふこくも南の新話よ偏ちるこく抜り隠

寺の他問ひ出ゆれ出すものに似くらくり乃む
ばくちれい曽て天下の是れまあるり遠山ば眺
形くこころにあるてばつるは
遠山ばこころばきつくれ杜るるん
とすて足るもあふ人とるくるるるるるる杜やのし
況や二の向に於たる服装の扱くくる宴り
あくくの宮ハいくはすくく付乃ちるふのハ乃の偏
に形ばすくくる所ゑ遠ふるは一の変化り表

寄れとて

物あまたたびに寄て宝乃口

尾はゝ寄ゝて冬乃字

是はとちゝ仏をゝれとゝ上ゝゝゝゝすの偏

あまをやまたの乱切ゝ仏ゝて一尾乃

仏ゝふゝけるに是ハつゝに足に、れハいけん

と定見の沿条ゝあつゝ法ゝたりゝれゝ

仏ゝつゝゝてゝつゝゝゝゝ行ゝゝゝ沿の

る栖と思つゝゝは今一切の偏ゝてゝの仏ゝめゝ

拝祝ゝゝゝゝは七名も八体もゝれ素ゝゝ

切ゝゝゝ一ゝゝも賀の尊体ゝゝ

切妙てあゝの仏れ切きゝみ

比白に毎ゝゝふゝ仏ゝゝゝゝゝゝのゝて一尾

冬ゝくゝゝやりゝゝ おゝゝを遠ゝのけゝゝゝ

切のゝちゝゝゝ切ゝて毎ゝは格ゝの沿ゝゝゝは

帝国ゝゝくゝゝあゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

その化者らびとうつ事

いよまらうふし毎乃あホ田

かゝつくりこれいその幸ゝその幸ゝ武ゝ武に

四ゝもくはせもとゝし仲ゝ乃ゝ乃や宮に為ゝ武物

せう行き二ゝの間ゝ利こはくの骨ゝ武天下を

其化者を付ま乃ゝ間を打くやすくとちゝみ

ゝ世やうゝ行つよやと乃上の四ゝゝ乃ゝ妙を

ゝゝゝ乃

角力ゝゝ坂と町ゝ武ゝ

世ゝゝさゝゝの者角力ゝゝ者ゝ人ゝみの武めゝ

ゝ角かゝきゝと乃ゝ武ゝゝれいゝゝゝ乃ゝ八孫ゝ賢

ゝゝ者ゝゝゝ武ゝゝゝゝ

敵の者ゝゝゝ武ゝゝ

是物所ゝ名養ゝゝ

ゝ奈ゝ席の仏僧ゝ里ゝ絵のはいゝゝゝゝゝ

はゝゝゝ平ゝ日ゝゝゝゝ仏ゝゝゝゝゝゝゝ

明眼の判者にあてんいとゝ一席の俳諧い宗匠
ちんはちしき又同志の輩におゝ仰ゝ別段に
論ずるに仰むさらい事毎の点ちゝは一軸毎
乃慶賀あゝ今こゝ元の襲点ゝ一神ちの
あゝひゝられともさゝ席ゝらひ点と見俳諧
此差おあゝてゝは仕あしいてゝもゝのゝ
平生の俳諧とゝてゝ実に席上の俳諧い才と
他のゝゝ仰ゝゝひ自己の明あゝば有ハ仕ゝ

ぴ仕に用ゝ仰むてゝひふゝあゝふあゝ吐むゝ自然
と真に明ゝゝゝ同内の作ゝい点れてゝを
り又他の判者ゝ尺ゝ時いゝとゝ異ゝ史ゝ
作りの仕ハ相違あゝ自己の日報ゝ
ちい点者の俳諧ゝいハれんいとむを明
柄路ゝ口癖ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ふゝすゝめゝハゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
尺ゝあゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

同和の文文は不分明にして是故実の詞う
ゆゑれと紛ひ頓ちうるかうもゆゑ似体と
まれゝねちみやくにあらんみれしつとあるに嗅ム
詩百貨りとあとうとて眼にしるしにくとあと
うあるく詩にあるいぶるあのうく傍誓乃神
ゆうゑ京うは少人に伊勢の今はかりあも
自然ゆゑ偽ふるゆゑに乃吐くすうも為依
の坂に為を点も赤教乃拝京ハやくす

一ちううゑ京あるハ又京すゑもあるもう
佐京の点れうあるあ祖文とうゑゆるて
巻あにうゆるうあ人序ゆふけし時
今音を祖文のうは左うあくさうの望に
急うう林月顧しはうみ知仏法すに
まゝ及くあ且のうに
ふをかハつく男ゆゑに
と知くうあ巻もよりあくと伊勢の人て

乃業法の事に関してふいに忘れうる事
はよく人の別名明人オに故人もりつる迄
時々他者の長所をん
各向者らは又拙さをもつてふつゝかや中日
しれら拙におうてをん先論たゞほ法の内
ろ宗をて多自所自の論にもてまれば
天地をうはのあやばつくれり目前の蓋
をはるを

ゆくはるの夢の泡やあの紅
是い中の者虎ゝ白ゝ者女の体やゝゆふはる
の詩寸自ろ宗内ふを他法とふまい嘘ゝ
ゝれにあるものとをて夢のつるをとまい
嘘ろ宗又ゆをはるてをんばるゝゝ
他法の大意歌ろゝ宮に人法の板をゝ
何ゝ人てを文字をわけいとゝむれ手生乃
ゝはをを夢のてをきまばゝふ

月のうへの一命やはてもなし

是も事無の点前うへの一夢とすれば

くるゝ前の夢ばかりもあるまゝ又かふやの

一命ハ今一夢の一生にくれて他国ハ

すでに死うゝ　死ぬれ妙つけく猫も

物ゝも悲ふてとまあらし碗の音ばかり

又あらぬ世の廟うゝ哀いとおもふ明ける

高花園の雪ハ加ゝをもうゝ

風やさはぐさいりうの雪　凍蛙

おくれのあるばかり尺寸有れ　雙瓦

新年に上戸ばかり結あるて　伊山

ゆ川うゝかうにあさほゝ　虞園

明ける春の明るにはゝまれ　瓦

一形　紀ゝ　村ばやゝ　ふ　壊

はゝふる月よかはるれけり　園

秋のまゝに和れ　雪　白　山

「去のわすれぬ芝の実ゝ　坊
乃てみすけと仕ふ小坊子　彩
山面のわけく狩雀やに妹の子　山
まかゝせ給たつゆ　岡
茶山をのあゝるゝ以い芋やす　お
すゝ姿人をしゝ　境
育ゝに浦茶壺の力も癒ゆ　山
書ゝれすみちのゝ山茶向　岡

いそゝめく餅の岡も初あゝし　山
一字おは一字拾ひ初や　乃
帆けらに魚ゝて尺ゝす蛍　蛍
蓼のあゝ青も通坂を越　岡
探題狩柳とかゆ桃乃　山
大氣よきふゝ人の鼻洲　坂
拘妓に本換もてゝろもつゝ　岡
種も扇子行れまゝ夕ゝ　乃

道のりに気をおはしてけど園

はちやうゝ兵ハちん　山

枯はるおれ　寒もほの枝　元

寒坊おろ事徒れ捨ち　坊

麦もつやすいを悟れく　山

仮り枯　ゆ事捨く打く笹　元

閑悦の老り明けれい沖丹　坊

茶てあゝ海ちんてけ公ス　園

仏病をてはひ歩と人の寒く　坊

あにかまて、ゝ味ちんゝ鳴　山

茶てゝ氣石のもふ乃月　園

合歓もこ茶にさゝり眠元　元

畏灯れ科況の居へ麻打ゆ　山

夕乃ゝ氣上下乃袖　園

追れ武おゝて猫もちくく　坊

日傘乃枯もゝ氏をゝてゝ　元

嘆けひちてもまむ不破の関　岡
大根も冷乃下て埋火　山
汚て居護符に砕くはてりやう　紫
雑の首中も百枝乃紋　元
和頭のまくれいる国さい　山
後茶坊主めくる原うう月　岡
けちハ変も可れほと明はう　和
机のくに居ッあつ原　慶

初もと一路尺をくれもやに　元
俗宝の鈴れあうとて　芝
おはろれを明てる通れの日よ　岡
くれぬ仏寺の道　山
助て原紙とろうつれも　元
毎日の絵うう春刊をいく　宗
路こもくを八国炉祝に百やう　山
那智のくよの仏星こて　元

学問よ欲のつく時おもしろい　賛
鐘しく打ッ次の居眠　岡
長刀れ牙子ひ草履よふんく並　武
たちれく汀こイ葛ハ匂ひ　山
紙豆のこゑしハまれ鶴の月　培
里の衆ハ新米よやくそく　岡
方丈をおとゞれ離れ篭ひ見て　山
まさ仲人のひろハこハかゆ　秋

白ふすの畑けハ簾も隔ておけく　岡
時よ菅つさゝあちゝも御座て　賛
かれ乃は無ひ吹ちる湾の声　武
見ひつふかしぬけれてる　山
あ〃時た秋夜六もしく節　賛
葉の近潟も出んきのほしるく　岡
冬坂乃かんろを甚乃んさみろく　山
落馬の池ひ笑ふ佐きりん　秋

暑に堪あふぐやうに草の葉　岡

下の白ばら東絵つゝ面白　情

炉明を毎の用も立つとう　瓦

ゝ拾ひて子と共ゝ学ぶさま　山

秋そのゝ原自にも出　車　情

口の水も解て尺八　岡

万家の葉紅明さかり　山

黒人風に吹れ甲子　瓦

改正に石板おかれて静かに　山

公園を目的として東京　瓦

信濃に暮不肖に撞木ひゞく　情

四月くハ有ありて夜中　岡

鼓越しを通る川を見　瓦

くまゝ鶏ゝ松灯ゝつ　情

欠伸も秋皇さにのやゝゆく　岡

あるの枝ゝを切ゝ下谷　山

拾遺の頃迄ゝ集と薬ゝ　懐

何ゝまに〳〵友ゝ〻男　新

和ゝ作師匠の世〻沙汰ゝ堂　山

漢かゝ文添すけゝのあと　新

会次ゝ墓盤紙是ゝよの歳　懐

特ゝ将の奥紙つけゝほ称　田

陸紙ゝ丈ゝ友ゝ新一ゝ　山

富士の麓ゝ紙ゝ作ふ　懐

ほ和ふゝは律系れゝゝ紙ゝゝ　山

聘も書き紙　踏人ゝかゝ　懐

ゝゝ玉ゝ米口とゝゝ赤ほ　田

宮の内紙　笑ふ中ほひこ　新

追加

聖書ゝと共に俳やかはゝ月　杉浩

山吹やけまゝに麻く紙ゝは　菊園

けつゝやゝは咲ん梅のも　百川

宮ゝん日の光りのあるに　あるまの和　古山

蓮ハ枝くまにゝ葉ゝの秋　司馬

幕月もほゝゑちや鶯ゆゝ　白雲

うくいすの加りに解氣和古氣　光田

梅ゝばよゝ　ふつけゝ　素猪

もゝてヤ女乃ちゝたゝあす射　千歩

ちゝ蕚　ものゝ氣ゆいゝ簾　蔭往

ゆゝ草ヤ猶ゝ鶯に　女螺

ありゝさゝよにこゝ百ゝ傘の音　南春

芋もはいとふ　鶯やは乃月　秋牛

人吉ゝ乃ばつゝむ田螺和　和鳴

鶯ゝの氣ゝよゝ乃白牡丹　三楚

たはさわゝあふ蛙やあはゝ月　冠子

ゆゝ立ゝ冠さゝ揚ゝおゝ　相京

人中ゝ入て散るもあや　山椒　漆河

揚おゝ素の一茎や麦の秋　笑車

おくるゝ春乃ゆくえの雲　砧上
灌仏や岩に生れし清あり　可登
こゝ月にくるあてなや梅乃花　丁路
松波の新しかくすやあのゝ　虎岡
松一里吹てゝ塚の秋風　伊山
白土にさかふふ麦や蛍の多　雙孔
京乳の一ゝゆうむ田乙舟　凉袋

延享五戊辰仲春

喜井

江戸日本橋通二丁目　梅村彌市
月次世子長木町　[illegible]
京寺町二條上ル　井筒屋庄兵衛

昭和十四年一月二十九日影寫校合